* ICU に入学を希望する受験生の学習のために公開している資料です。
ICU 公式の試験問題用紙ではありません。
(This is NOT the official Exam.)

No.000001

受験番号					
------	--	--	--	--	--

人 文 科 学

問題冊子

指示

合図があるまでは絶対に中を開けないこと

0. (You can do it. You're almost there.)
1. この試験は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができるかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に 40 の問い(1-40)があります。配点は 80 点満点です。解答カードには表裏あわせて 100 の解答欄がありますが、41 以降は使用しないでください。
3. 解答のための時間は、正味 70 分です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて 70 分をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります。答えが指示どおりでないと、正解でも無効になります。
5. 答えはすべて、**解答カード**の定められたわくの中に**鉛筆**を用いて書いてください。それ以外のところに書いたり、また答え以外のものをかきこんだりすると無効になります。
6. 一度書いた答えを訂正するには、消しゴムで**きれいに消してから**、あらためて正しい答えを定められたとおりに、はっきり書いてください。
7. メモにはこの**問題冊子の余白**を用い、ほかの紙は使用しないでください。
8. 「**考査やめ**」の合図があったら、ただちにやめてください。試験監督が問題冊子と解答カードを集め終わるまでは、退室できません。
9. この指示について質問があるときは、試験監督に聞いてください。ただし問題の内容に関する質問は**いっさい受けません**。

「**受験番号**」を解答用カードの定められたところに**忘れずに書き入れること**

影について考える

I

「奇妙な情景の警え、奇妙な囚人たちのお話ですね」という感想を一人が漏らした。するとその相手は「われわれ自身によく似た囚人たちのね」と答えた。これは決して牢獄での話ではないし、犯罪者同士が会話しているのでもない。それどころか、ここで言われている「われわれ自身」というのはれっきとした市民であり、何事にも不自由を感じずに立派に生きている人たちのことである。それでは、何故囚人のことが話題になるのだろうか。どういう点で、対話者たちは囚人と似ているというのだろうか。

とにかくまずこの「奇妙な情景」を見てみよう。

「——地下にある洞窟状の住まいのなかにいる人間たちを思い描いてもらおう。光明のあるほうへ向って、長い奥行きをもった入り口が、洞窟の幅いっぱいには開いている。人間たちはこの住いのなかで、子供のときからずっと手足も首も縛られたままなので、そこから動くこともできないし、また前のほうばかり見ていることになって、縛めのために、頭をうしろへめぐらすことはできないのだ。彼らの上方はるかかところに、火が燃えていて、その光が彼らのうしろから照らしている」。

確かに奇妙な情景である。これはプラトン（前427/8-347/8）の代表的著作『国家』第七巻の冒頭の場面である。そこでは教育を受けることの「警え」が語られ、「われわれ人間の本性」をどう考えるかが問題となっている。人間の本性は、つまり人間は生れたままでは囚人であるというのである。

このような状態の囚人たちは、生れてこの方ただ壁に映った動物や人間やそのほかのものの影だけを見ているのであり、聞くのもその影に関して語られる言葉だけということになる。こうした想定では、人々が向き合っている壁に映る影こそが語られるもの、たとえば牛であったり馬であったりするので、それを影だと考えることはありえないことになる。

こうした状況で、たまたまある人が束縛から自由になり、背後を振り向くように強制されるなら、どういうことになるだろう。暗がりの影を見慣れた目にとって、それまで背後にあった明るい光はまぶしく、眼がくらむばかりか、光を見ることは苦痛で耐え難いであろう。「向き返って、自分がよく見ることのできるものの方へと逃げようとするのではないか」とプラトンは述べている。さらに力づくで洞窟の急な登り坂を引っ張られ、太陽の光の中に連れ出されたらどうなるかは想像に難くない。以前壁に映っていた影こそはっきりした真実のものであって、

いま白くかすんでいる一切は定かならぬ幻、頼りない影のようなものと感じるであろう。もちろん時間の経過と共に、暗闇に慣れていた目も太陽の光の下の事物を見ることができるようになる。プラトンもこのことに注意を向けている。目が正しくものを見るようになるには、慣れが必要なのである。「まず最初に影を見れば、いちばん楽に見えるだろうし、つぎには、水にうつる人間その他の映像を見て、後になってから、その実物を直接見るようにすればよい。そしてその後で、天空のうちにあるものや、天空そのものへと目を移すことになるが、これにはまず、夜に星や月の光を見るほうが、昼間太陽とその光を見るよりも楽だろう」というのである。

やがてこの人は、以前の洞窟の中の仲間たちに、彼らの知らないこの真実を伝えようと考え、きた道を戻っていく。ところが洞窟に戻ると、そこでは他の人々の方がはっきりとものの像を見分けることができるのである。ここでは影こそが真実なのである。それで、この人は人々の失笑を買い、上に行くとき目を駄目にしてしまう、上に行くのは意味がない、という意見を抑えられないであろうというのである。この話は「洞窟の比喩」と呼ばれているが、どうもこんにち我々が教育を受けるということで抱くイメージとは大きく異なっているように思われる。

事実、マックス・ヴェーバー（1864-1920）は『職業としての学問』のなかで、この洞窟の比喩が教育や学問について学生たちが抱く感じ方とまったく逆であると述べている。「しかるに、こんにちなんびとが学問をこのように考えるであろうか。こんにち、とくに若い人たちの学問にたいする考え方は、もうとつとつこれとは逆のものになっている。すなわち、学問がこしらえあげる思想の世界は、人為的抽象からなる影の国であり、この人為的抽象は、そのひからびた手によって実生活の血や汁気をつかみとろうとするが、しかもついにこれをなしえない。ところが、この実生活のなかには、というはつまりプラトンでいえばかの洞窟の壁に踊る影絵の中には、真の实在が脈打っている。これ以外のものは、みなこれから派生したものか、そうでなければたんなる幻影にすぎない。このようにかれらは考える」。

プラトンの譬えでは、洞窟の内と外は我々人間の意識の働き方の「比喩」となっている。「洞窟の内」はものを目で見、手で触るように感覚器官を通じて知るような事柄である。それに対して、「洞窟の外」の世界は感覚ではなく理性と思考によって知られる事柄である。美しい花、美しい景色、美しい絵はじかに見ることができる。しかし、一つひとつの花の美しさは衰え、失われるし、美しい絵も保存が悪ければ劣化し、あるいは毀^{こわ}されるかもしれない。ところが、それら全部を美しいと理解させる共通の何かがあるはずである。そうした美しさの根拠といえる美しさそのものは変化したり、失われたりすることがない。ただこうしたものは直接に見ることはできず、「(思惟によって)知られる」のである。それをプラトンはアイデアと名づけている。さて、見られるものの範囲内ではものの影とその本体の区別がされるが、この関係が次には「見られるもの」と「知られるもの」の間関係に対応するというのである。影がそのまま存在しているものでないように、「見られるもの」、感覚されるものは、ものの本当の在り方を

教えてくれない、ということをプラトンは述べている。ものの本当の存在を捉えるためには、見るのではなく、知らなければ、認識しなければならないのである。それが洞窟の外に出るということである。

少し難しい話になってしまったが、解りやすくいうと次のようになる。プラトンよりも少し前に活躍し、「万物の尺度は人間である」という有名な言葉を残したプロタゴラス（前490頃-414）という代表的なソフィストがいる。同じものでも寒い外から来た人には暖かく、暖かい室内にいた人にとっては冷たく感じられるが、暖かく感じる人にとってそれは暖かいものだというのである。乱暴であるが、これを主観主義とか相対主義とっておこう。他方で、感覚ではなく「知られるもの」の例を挙げれば、数学の知識である。それは見たり、触ったりできないが、一人ひとりによって違わない、同一で不変の真理を示す。そうするとヴェーバーが言っていることは容易に理解できるだろう。当時の大学生たちが感じていたのは、何のために学問をするのか、学問は実生活にとってどのような役に立つのかという疑問だったのである。具体的に感覚されるものに関わる実生活（プラトンでは洞窟の内）と学問の知識（洞窟の外）を比較すると、一方では真の実在が脈打っており、他方はひからびた手の作業のようなものと感じられるのである。

ヴェーバーはプラトンの考えは逆ではないかといっていた。しかしながら、プラトン自身も知識の獲得についてのこの譬えを、彼が生きた紀元前4世紀のアテナイにおいて簡単に理解されるものとは考えていなかったのである。「そもそも教育というものは、ある人々が世に宣言しながら主張しているような、そんなものではないということだ。彼らの主張によれば、魂のなかに知識がないから、自分たちが知識を中に入れてやるのだ、ということらしい」。ある人々とここで言われているのは、プロタゴラスなどのソフィストたちと考えるとよいだろう。この時代ソフィストたちは教師として大変尊重されていたのである。考えてみると、洞窟を出て太陽の光の下で物事の真相を知った人は例外者だったのである。だから人々のもとに戻るとき、彼は孤立の運命を避け得ないのである。それどころか憎しみを買うかもしれない。「もしこれを何とかして手のうちに捕らえて殺すことができるならば、殺してしまうのではないだろうか」とまでプラトンは書いている。教育を受けることで影と実物との関係が以前とは逆になるように、プラトンがここで主張している教育は、魂を「暗闇から光明へ転向させる」ことを意味していて、生れて以来獲得してきた知識を延長して増やしていくことを意味しているのではないのである。

ところで、プラトンの考察は、影とそのもとの実物を切り離し、対立させているが、この問題の立て方にはある種の理想化が含まれているのではないだろうか。確かに「比喩」であるにしても、影を切り捨てた光明だけを我々は捉えることができるのであろうか。そしてそれが意味を持つのだろうか。プラトンは、上の引用にもあるが、洞窟の外に出たあと目が慣れていく段階を述べた際に、影から始め、夜に星や月を見た後で太陽を見ると言っていた。これは正し

い知識を得ていく段階である。そして最後には「太陽それ自体を、それ自身の場所において直接しかと見てとって、それがいかなるものであるかを観察できるようになるだろう」とまで言われる。もちろん、我々はこれが「比喩」であること、だからここで太陽といわれているのは、肉眼で「見られるもの」ではなく、思惟によって「知られるもの」、最高のイデアであることを忘れてはいけない。しかし、そうしたことは肉体を備え、感覚をもつ人間の在り方を脱却しない限り達成できないことではないだろうか。

II

プラトンの『国家』は教育に関する古典中の古典であるが、我々はここで教育の問題を、あるいは哲学の問題を考えようというのではない。そうではなく、プラトンにもヴェーバーにも共通しているものの捉え方を問題にしたいのである。それは影の問題である。プラトンでも、そしてそれに基づいたヴェーバーの指摘でも、影は劣った、価値の低いものとされている。たしかに、影にはそういう意味が含まれている。しかし現実の物事をていねいに考えようとするなら、影ともの本体はそう簡単に区別され、しかもそれぞれ別個に取り上げて論じることができるのだろうか。

まず最初に、「かげ」という言葉を整理して考えてみよう。かげに当たる漢字は影、陰、蔭そして翳がある。普段あまり気に止めることもないが、大別すると影とあとの三つには基本的な違いがある。ここでは影と陰について見ておこう。漢字の陰は右の旁が「暗い」を意味する語源に由来し、左の偏は山の側面の意味で、太陽の当たらない、暗い山の側面を意味している。これに反して影の字は景が音を表し、日光の意味を持っている。したがって元来光と密接な関係があった。次第に光が陽を意味し、逆に景の方が陰をさすようになり、さんづくり（𠂔）をつけて影を表すようになった。したがって国語辞典を引くと、陰のほうには影に含まれている「光、灯火」、「姿、物の形」あるいは「本体に付き添って離れないもの」というような意味は含まれておらず、基本的に「光が遮られて当たらない所」という意味になり、そこから「人の目の届かない所」とか「表面に現われない所、物事の裏面」などの意味となる。

この区別はほぼ英語のshadeと shadowにも見ることができる。前者は電球の覆いの意味でも使われるが、基本的に陰に通じるといえるだろう。Shade of a treeと言った場合は、木陰であって、木の作るかげではあるが、その形体ではなく、それが光を遮断していること、日が当たらないことを第一義的に意味する。これに対してshadow of a treeという言い方ではshadow of a personの場合と同様に、見られる影の意味が強く出ているのである。もちろんこの二つの語は常に厳密に区別されているわけではない。日本語の場合にも陰影という言い方があるが、二つの語は意味の重なりもあり、一定の範囲では相互に交換可能でもある。shadeやshadowは語源

的には暗さを意味するインドゲルマン語のskod-から出ていて、ドイツ語のSchattenの語源と同じである。これとは別に、元はフランス語で、日本語でも英語でも使われるシルエット、Silhouetteという語がある。これは漢字の陰影や、shade, shadow, Schattenなどのような、暗さ、かげを意味する語源をもつ語とは全く異なっている。もともとフランスの財務大臣エティエンヌ・ド・シルエット（1709-1767）が節約、緊縮財政のため肖像画を色のない、黒い影で描くことを要求し、それが人気を得ることで成立したと言われる概念である。実際に18世紀にはこうした黒く塗りつぶされた肖像画が大変人気を得ていて、古い書物などでよく見られたものである。ドイツ語にはSchattenrissという言葉として定着している。

先ほど、プラトンについてそこに一種の理想化があるのではないかと指摘した。プラトンの影の論じ方は、一定の意味の影に限定されているのである。プラトン自身も述べていることだが、洞窟における影を、ちょうど人形劇の舞台、もっと適切には影絵の装置を借りて論じているのである。その場合、影はそれ自身が形ある対象であって、対象の影でないのである。こうした場面では、振り返らない限り何かに「伴っている」という影の本来のあり方に気付くことはない。主役を引き立てる脇役が、主役と同じように舞台の中央で注目を浴びることになるように。

影絵では、影は現実や実物の影というより、その模倣、模写という独立の存在の意味をもってしまう。むしろ影武者という言葉があるように、「本体そのものではない」、「身代わり」という意味が影に含まれることは否定できない。しかし、影の意味はそれだけではない。ここでは光によって投影された影、しかも実物とは切り離された影が問題になっているが、影はもともと本体と切り離せないし、たとえ切り離されても常に本体あつての影である。影だけが存在することはありえない。では逆に、影を持たない本体はあるのだろうか。影を持たないようなものは、それだけで実在性を疑われるのではないだろうか。このことは「影も形もない」という言葉遣いが示している通りである。

じじつ影は、単にそのもとの本体から離れた別の表面、例えば壁に映し出されるものとは限らない。人物の顔を仔細に見るなら、そこには表面の凹凸や曲面に応じて、また明るさの当たり方の微妙な変化に応じて、実は細かい陰影があり、そのおかげでその顔は生きて変化する顔として見えるのである。印象派の画家セザンヌ（1839-1906）はその晩年プロヴァンスのサント・ヴィクトワール山の絵を数多く執拗に描いているが、彼がその際に満足いくまで追求して、新しい絵画表現の可能性を切り開いた中心問題の一つは、山の陰影をそのままに描き出すという問題であった。

「あの山の上にはプラトンの洞窟がある。見たまえ。大きな雲が通りすぎる時、雲の上から落ちてくる影は、さっそく火口で焼かれ、飲まれ、様々に岩の上で打ち震える。

ながいこと、ぼくは、あのサント・ヴィクトワール山が描けなかった。それをどう描いていいか解らずにいた。というのは、よくものを見ていない人たちのように、ぼくは影がくぼんでいるものだとばかり思っていたのに、ほら見たまえ、影はふくれあがっていて、その中心から飛びだしているからだよ」。

セザンヌはここで、ものを見る際に言葉の理解が影響を与えてしまうこと、また考えられた観念によっては絵が描けないのであって、ものをよく見てこそ描くことができると述べているのである。そしてものをよく見るということとの関連で、影の、陰影の理解が重大な意味を持っていることに気づいているのである。頭のなかで作り上げられた、あるいは言葉の意味に影響された山の姿でなく、画家に対峙し、眼前に実在する山の質感を損なうことなく、見られたままの山を二次元のキャンバス上に写すためには、プラトンの場合とは全く違う、細心の観察が、そして陰影への集中が必要になるということであろうか。

III

プラトンの場合、影は主役ではなく脇役であった。ただし、それは主役ではなく脇役だということに常に意識させるような扱いになっているといえよだろう。たしかに影あるいは陰影というものは、何かに付き添い、何かに伴っていて影なのである。その意味で影は優れた脇役のように、それ無しではすまない不可欠だが目立たないものといわなければならない。

しかし少し考えてみよう。実際の人間の認識器官ではどれほど訓練を積んで慣れても、太陽を直視してそれを明瞭に見ることは不可能である。それが理想化のはらむ問題であった。それだけではなく、あまりにも明るすぎる太陽の光、あるいはあまりにも暑すぎる太陽が、人間の生活の条件となっている地域においては、むしろ影こそが貴重であり、生命を支えるものとなることは容易に想像がつく。たとえば何一つ遮るもののない砂漠ではどうか。光や熱は生命を脅かすものであり、そこで求められるのは水と影を提供するオアシスである。太陽の直射から身を守ってくれる木陰はそうした生活圏では逆に大変貴重なものである。

「時に主なる神は、ヨナを暑さの苦痛から救うために、とうごまを備えて、それを育て、ヨナの頭の上に日陰を設けた。ヨナはこのとうごまを非常に喜んだ」(ヨナ書4章6節)。

これは「旧約聖書」の預言者ヨナの話である。さらに紀元前8世紀のイスラエルの大預言者イザヤなど、神自身を陰と言い表している例すらある。

「あなたは貧しい者のとりでとなり、乏しい者の悩みのときのとりでとなり、
あらしをさける避け所となり、熱さをさける陰となられた」(イザヤ書25章4節)。

もちろん聖書において陰あるいは影が否定的な意味で用いられる場合もある。人の命のはかなさをヨブは次のように述べて嘆く。

「われわれはただ、きのうからあった者で、
何も知らない
われわれの世にある日は、影のようなものである」(ヨブ記8章9節)。

このように『聖書』のなかで、かげは否定的な意味と肯定的な意味の両方で用いられている。しかし特に印象深く響くのは神の翼の陰という言葉であろう。「あなたの翼の陰をわたしの避け所とします」(詩篇57篇1節)。これは親鳥が雛を翼の下に保護する情景に基づいて神の保護と助けを表した言葉といえる。いずれにしても、光ばかりの世界とか、過剰な光と熱という現実を考えるならば、陰あるいは陰影というものが人間の生存にとって不可欠であるということに気づかされるのである。

IV

このように、影がないと人間は生きていけないのである。いやそもそも、影がないということとは元の本体も存在しないという意味になる。当然あって不思議でない影がなかったらどうなるか、影を得るといことはどのようなことを意味するか、そうしたことを考えさせる物語がある。20世紀のオーストリアの作家フーゴー・フォン・ホーフマンスタール(1874-1929)が1919年に書き上げた『影のない女』という作品で、『エレクトラ』『バラの騎士』『ナクソスのアリアドネ』などと同じように作曲家リヒャルト・シュトラウス(1864-1949)との共作のオペラにもなった作品である。

精霊の世界の王の娘がかもしかに変身している折に狩猟中の皇帝に射られ、殺されそうになる。その瞬間娘は人間に変身し、それを目撃する皇帝の顔も劇的に変化する。緊張の中の相互の変貌がもたらした二度とありえない幸福によって、精霊の王女は皇帝の妃となる。物語は、精霊であるため影のない妃に影が伴うようにならないと、皇帝は石になり、妃は再び精霊の国に帰らなければならないという定めを妃が知ることから始まる。その期限は三日後である。妃

は乳母に何がなんでも影を手に入れるのを助けて欲しいと懇願する。

「わたしを助けて影を見つけて！ 頼りはおまえだけ。さあ教えて、いったいどこに影があるのです。衣装をかなぐり捨てて、深い海の底へ潜ってゆくこともしましょう。いったいどうやって影を買い取ればいいのです」。

それまで妃は皇帝の宮殿の最上階に住み、人間社会の喧騒から隔離した二人だけの生活を送っていた。そこは人間の声も聞こえず、人の影も差さない、人々の世界から離れた場所である。また精霊の世界でもない。それは真実の生活が欠けていることを暗示している。影を生じない妃の身体は「まるで水晶でもあるかのよう」であるが、それは同時に精霊にとって血と肉体と死とは無縁であることを暗示している。それが皇帝を救うために、影を手に入れようというのである。

妃は、乳母といっしょにみすぼらしい姿に身をやつして、初めて人間社会の現実のなかに、雑踏と臭気に充ちた都会の路地に入って行く。ある家から聞こえてくる激しい言い争いの声に乳母は足を止める。染物工バラクの妻が夫とその兄弟たちに向ってののしる声であった。乳母はバラクの妻にその若さと美しさが変わらないようにすることを約束し、その代わりに子どもを生まないことを誓わせる。それが影を受けとる契約の内容であった。

家政婦のような形でバラク夫婦の生活の場に身を置き、その生活をじかに感じるなかで妃の無邪気な願望は疑いに覆われてくる。喧嘩が絶えないとはいえ、互に相手に魅力を感じている夫婦のあいだを裂くまでしなければ影は手に入れられないのか。「影を手に入れるために、だれか人間に仕えましょう。その家はどこにあるのでしょうか」というのが、妃の最初の言葉だったのである。三晩が過ぎた嵐の晩、バラクの妻から影を手に入れる決定的な瞬間、それはまた夫婦の断絶の時であり、まさにバラクが怒りに任せて妻を捕えようとした時、灯が消え真っ暗闇になる。呆然とするバラクの足を抱く姿でその足元に女が倒れている。灯がつくと、その女は妃であった。妻もその場に立ったままである。今にも殺そうとした妻の眼差しにバラクはそれまで見たことのないものを見出す。妻も相手のなかにライオンのような荒々しさと子供のような無力さの分裂を感じ、「その二つを一つにつなぎ合わせたいと」という願いを抱く。ホーフマンスタールは「この瞬間、二人はまことの夫と妻になった」のである、と書いている。

まさにその瞬間に契約は履行されてしまう。影は妻の背から離れてゆき、妻の姿は消えてしまう。妃は意識を失ったまま倒れている。そこで、乳母は妃を連れて精霊の世界に向って行く。実はこの時に、すでに狩に出かけた皇帝は石像になっていて、呪いの定めが成就したように見えるのである。精霊の世界で記憶を取り戻した妃は乳母に語りかける。「わたしのために、あの人たちをもう一度見つけるのです。たとえばあの家が何千マイル距たったところでも。わたしたちはあの人たちに対して盗人、人殺しになってしまったのですから。わたしたちのからだの血のすべてをもってしても、わたしたちがあの人たちに加えたことを償うには少なすぎます」。

乳母から離された妃は石に化した皇帝の像の場所にたどり着き、もう自分はおしまいだという思いに満たされる。そのとき妃自身の胸の奥から浮かびあがってきた言葉をそのまま妃は口に出す。「バラク、あなたにわたしは責任があります」。ここで「責任がある」と訳されている言葉“schuldig”は「負債がある」、「借りがある」という意味で、裁判では「有罪である」という糾弾されるべきことについて責任があるという意味である。むしろ「責められるべき」とか「負い目がある」と理解するべきであろう。そして、影を手に入れるという目的が失われたかに見えたまさにこの場面において、妃に影がまとわりついてくるのである。

一方バラクの妻も影のない人間という姿で精霊の国に移されていた。そしてバラクも妻を探し求めて精霊の国にたどり着く。バラクの妻は自らの行ったことの責任を覚え、処刑場に向う人の姿で漁師夫婦に連れられていく。その歩みの間にバラクの妻にも影が戻ってくるが、本人は気づかない。「染物屋の妻の影は持主のもとに飛んでゆき、その足もとにはたと落ちた。彼女はそれに気がつかなかった。最期を覚悟したその心は、もうすべてを夢見ごちに受けとるだけなのである」。これはバラクが妻を許したことを意味していると考えられる。そこで、彼女は訪ねてきたバラクと思いがけず鉢合わせになる。恐怖を覚えてとっさに逃げだす妻と、それを追うバラク。追いつかれるのではとおびえて振り向いた妻と、いたわりと愛の言葉を叫ぶバラクの中に妻の影が飛んでついてくる。それに気づいて、二人は喜びのなかで抱き合うのである。

このように死の暗黒に触れることを通じて生じる人間讃歌の明るい希望に終わるこの物語は、孤立と憎しみを自己犠牲と愛によって救う話、愛と変容を通じての他者救済と相互変容の物語となっている。そして、影を獲得すること、つまり人間として人々の間で生きるということのために、どれほどの努力と自己犠牲が必要であるかを思わせる内容になっているのである。

確かに、影はそれ自体独立して存在するわけでもなく、それ自体が価値を持つわけでもない。しかしどこまでも目立たない存在として、影が本体に付き添い、本体から切り離されないことによって、初めて本体が本体としてありえるのである。いや影があって初めて実物である本体があるといえるのであろう。

我々はここで、影の持つ意味について何らかの結論を得ようとは考えない。そうすれば、それは意図を否定することになるかもしれないのである。ただ、影というような、それこそ普段気にもされないもっともありふれたものであっても、それがなければ実は事物の陰影の深みが失われてしまい、当たり前とと思っているものの捉え方すらきちんと成立してこないことがあることを知ることで、我々の周囲にある多くの当たり前で、軽んじられているものに含まれている意味や重要性に対する感覚、注意深さを新たにできればと思うのである。考えてみればプラトンにしても、真実の知識を真実なものとして示すためには影の助けを必要としたのである。

参考文献

- プラトン『国家』（『プラトン全集』第11巻）藤沢令夫訳、岩波書店、1976年
- 松永雄二『知と不知 —プラトン哲学研究序説—』東京大学出版会、1993年
- M. ヴェーバー『職業としての学問』尾高邦雄訳、岩波文庫、1993年
- J. ギヤスケ『画聖セザンヌ、その生涯・その言葉』成田重郎訳、東京堂、昭和17年
- M. メルロー・ポンティエ『知覚の現象学』1. 竹内芳郎、小木貞孝訳、みすず書房、昭和42年
- H. フォン・ホーフマンスタール『影のない女』高橋英夫訳（『ホーフマンスタール選集2』（小説・散文））河出書房新社、昭和47年
- H. von Hofmannsthal, Sämtliche Werke, XXXIII „Erzählungen 1“, S. Fischer Verlag, 1975
- 山中康子「ホーフマンスタールの物語「影のない女」——他者を求めて——」獨協大学編『創立20周年記念論文集』昭和59年
- ヴィリー・シュー（編）『リヒャルト・シュトラウス／ホーフマンスタール往復書簡全集』中島悠爾訳、音楽之友社、2000年
- 『聖書』（口語訳）日本聖書協会、1987年

次の問題（1－40）には、それぞれ a, b, c, d の答えが与えてあります。各問題につき、a, b, c, d のなかから最も適切と思う答えを一つだけ選び、解答カードの相当欄にあたる a, b, c, d のいずれかのわくのなかを黒くぬって、あなたの答えを示しなさい。

例 a

b

c

d

e

1. 洞窟の中の囚人たちが意味しているのはどういう人たちか。以下の中で最も適切なものを選べ。
 - a. ソフィスト達のいう教育を受けていない人たち
 - b. 教育を受けていても、魂の向きを変えていない人たち
 - c. 影を影として理解する可能性を持たない人たち
 - d. 背後の光が眩しいために、後ろを振り向こうとしない人たち

2. 本文で我々が囚人と似ているといわれている理由として、以下のどれが最も適切だと考えられるか。
 - a. 対話者たちが洞窟の中に縛りつけられていて自由に身体を動かさないからである。
 - b. 対話者たちは影と実物の違いを、影絵や人形劇でしか考えていないからである。
 - c. 対話者たちは自分たちがまだ洞窟の中に留まっていて、本当の太陽を見ていないと考えているからである。
 - d. 対話者たちは人間の本性がこの囚人のようなものであると考え、自分たちも同じであると考えているからである。

3. 洞窟の囚人たちは壁に映る影を「影だと考えることなどありえない」と述べられているが、その理由として最も適切なものはどれか。
 - a. 誰も影を見たくて見ようとする人はいないからである。
 - b. 影を単に目で見るだけでなく、声でも聞いて理解しているからである。
 - c. 影を脇役として理解する可能性が与えられていないからである。
 - d. 影は目に見えるものよりもっと曖昧で不確かなものであるはずだからである。

4. 「洞窟の比喻」に出てくる人間の本性に関して、以下の論述のうちで筆者の解釈に最も近いのはどれか。
- a. 人間の本性は洞窟のなかにいることであるから、人間はみな例外なく洞窟の内部にいて、外にいることはありえない。
 - b. 人間は教育を受けると洞窟のなかにおれなくなり、その本性を失うことになる。
 - c. 苦勞して坂道を登り、洞窟の外に出ようとするのは人間にとって本性的な傾向である。
 - d. 洞窟のなかにいることが人間の本性ではあるが、それは教育によって向上させることができる。
5. 壁に映った影を現実のものと思ってしまう心の状態に最も類似しているものは、次の中のどれか。
- a. 自分の国の言葉しか知らない人が他国の言語を聞いたとき、相手がきちんとした言語を話せないと感じること
 - b. 海を見たことのない人が、海をはじめて見たとき、それを湖だと思ってしまうこと
 - c. 正方形の二倍の面積を求めるときに、それぞれの辺の二倍の正方形が正解だと考えること
 - d. 地動説を知っていても、太陽や星が地球の周りを廻っていると感じてしまうこと
6. 「ある人が束縛から自由になり、背後を振り向くように強制される」場合に囚人が感じる困惑、苦痛に最も近いものは、以下のうちどれといえよか。
- a. 学習や勉強が要求する不自然で無理な努力の辛さ
 - b. それまでの慣れや習慣を変えることの難しさ
 - c. よく解っていると思っていたことが解らなくなる困惑
 - d. 時間の経過を経ずに見慣れないものを判別する難しさ
7. 資料には「さらに力づくで洞窟の急な登り坂を引っ張られ、太陽の光の中に連れ出されたら」とあるが、ここで言われていることは以下のどれに最も近いと言えるか。
- a. 囚人たちはもともと洞窟に暮らすようにできているので、自然のままではその外に出る可能性を持っていない。
 - b. 囚人たちにとって洞窟の内部の方が眩しくなくて心地よいため、そちらに戻りたがる傾向をもつ。
 - c. 囚人たちが教育を受けることができるためには、彼らを洞窟の外部に引き出すような役割の存在がなくてはならない。
 - d. 囚人たちは自然本性では外に出ようと思わないが、囚人の中には力づくで仲間を連れ出そうとする者もいる。

8. 洞窟の外の世界で目が慣れるようになる順番が述べられているが、それに関して以下の中で最も適当なものを選べ。
- 人間の目にとっては事物の影や反射像が、その本体よりも捉えやすい対象である。
 - この話では、夜見る月や星の方が、昼間に見られる事物の本体よりもより優れたものとされている。
 - 洞窟の外では太陽が一切の認識の源であり、それに対して月や星はその影の役目を果たしているにすぎない。
 - 光に慣れるまでは、太陽の光でものを見るよりも、夜の弱い光でものを見るほうが順序として先である。
9. ヴェーバーが彼の時代の学生の学問観はプラトンの「洞窟の比喩」とは逆の理解になっているというが、その点に関して、以下のどれが資料の問題展開に近いといえるか。
- 学問が与える知識は現実に存在するものの弱々しい影であり、洞窟の壁に映っているものである。
 - 洞窟に映る影は感覚や肉眼の対象で、そうしたもののほうが真に存在しているものである。
 - 洞窟の外部の事物は、学問的知識というよりもむしろ日々の実生活の現実である。
 - 洞窟の外部の明るい光は、目を眩ませて薄白い、ぼんやりした影のようなものしか示さない。
10. プラトンの「洞窟の比喩」が学問の理解において逆であると感じた学生たちにとって「真の实在が脈打っている」といえるのはどういうもののことか。
- 壁に映るものの影がプラトンにとって意味したものである。
 - 感覚ではなく、理性の思惟で把握される確かなものことである。
 - 洞窟の外の真実のものの姿がプラトンにとって意味したものである。
 - 感覚的に理解できる現実の生活の様々な現実のことである。
11. ヴェーバーの言葉に「すなわち、学問がこしらえあげる思想の世界は、人為的抽象からなる影の国で」とある。この場合の影の意味として以下のどれが最も適当であるか。
- 表立っては見えない人や物の存在を暗示するもの
 - かすかな形だけで実体のないもの
 - 水面や鏡などにうつるものの姿
 - 本物を真似て作り出されたもの

12. プラトンの「洞窟の比喩」において「見られるもの」と「知られるもの」の関係の理解で最も適当なのは、以下のどれか。
- 洞窟の壁に映る影と影のもとの本体との関係である
 - 洞窟の壁に映る影と影を生み出す光源との関係である。
 - 太陽とそれが作り出す影との関係である。
 - 洞窟の内部とその外の世界の関係である。
13. 「洞窟の比喩」によってプラトンが示そうとしている区別と対比の理解として最も適当なのは、以下のどれか
- 目で見ることのできる美しい花々や美しい絵画などは、洞窟の中の影のもとになるものを表している。
 - 美しさそのもの、美のアイデアは目で見ることができず、思想によって捉えられる影のような存在である。
 - 洞窟の中で見られる影のもとになる実物は、思想によって捉えられる本当の存在、アイデアである。
 - 思想によって捉えられ、知られるものは消滅変化することはないもので、洞窟の外の世界のものでもない。
14. 「教育を受けることで影と実物との関係が以前とは逆になるように、プラトンがここで主張している教育は、魂を「暗闇から光明へ転向させる」ことを意味」と述べられている。このことの意味として以下の論述のうちで最も適当なものはどれか。
- 教育を受けることで、以前は実物と思われていたものが影となり、逆に影と思われていたものが実物とされることである。
 - 教育を受けていないことは暗闇と同じで、何も理解していないまったくの白紙の状態といてよい。
 - 影以外に何も見たことがない人はそれを影と理解することはできないが、魂の向きを変えて光を見れば、影と光の違いは直ちに判然とする。
 - プラトンは光と影を対立において捉えており、教育を受けようとするものたちはそれまで得たものを否定できなければならない。

15. プラトンの考えでは教育を施そうとすることは憎しみを買うことになるといわれるが、その理由にはならないと思われるものは以下の中のどれか。
- 教育が魂の向きを変えると意味をもつからである。
 - 教育のあるなしは、光と陰のように互に相容れないものだからである。
 - 教育が欠けている知識を魂に注入することを意味するからである。
 - 教育が理解しがたいことを求めさせる意味をもっているからである。
16. プラトンの教育に関する理解について、以下の論述のうちで最も適当なものはどれか。
- 知識を獲得することが教育であるから、洞窟の影だけでなく、できるだけ数多くの異なった知識を獲得することが必要である。
 - 教育を受けることで、それ以前に身に付いたものはすべて影であることが理解できる。だから影とは無縁の世界に生きることが大切である。
 - 教育を受ける前に獲得したものから身を転じることが必要であるが、教育の営みにとってはそのことを洞窟の人々に伝えることが大切である。
 - 真の教育が成立するためには見ることや感じることを拒絶して、物事をひたすら理性的に考えていくことが必要である。
17. 資料ではプラトンの考察には「ある種の理想化が含まれているのではないだろうか」といわれているが、その意味に最も近い理解はどれか。
- 影を伴わない光というようなものが考えられている。
 - 感覚を否定するプラトンの理想主義的哲学の見方が前面に出ている。
 - 影は洞窟の中だけでなく、洞窟の外の世界にも認められている。
 - 影はシルエットのようにもとの形を現しており、影の理想化である。
18. 「かげ日向のない人」という言い方があるが、この「かげ」の意味について最も適当なのは以下のうちのどれか。
- 「かげで糸を引く」という場合のかげの意味に近い。
 - 「かげも形もない」という場合のかげの意味に近い。
 - 「かげの薄い存在」という場合のかげの意味に近い。
 - 「かげ法師」という語におけるかげの意味に近い。

19. 太陽の直射から身を守ってくれる木陰の意味に当たる最も適切な言葉はどれか。
- shadow
 - shade
 - silhouette
 - Schattenriss
20. ドイツ語のSchattenrissに関する次の記述のうちで最も適切なものはどれか。
- この言葉に暗いとか光がさえぎられるという意味合いは含まれていない。
 - 物の形よりは暗いあるいは黒く塗りつぶされたという意味が主要な意味となる。
 - フランスの財務大臣の名前を表わす言葉であって、元来固有名詞である。
 - 18世紀に流行った黒い影による人物画を意味し、物の黒い形を意味する。
21. 「本体あつての影である」という「影の本来のあり方」を説明する文章として、以下のうちどれが最も適切であるか。
- 影絵で用いられる影は影というべきではなく、むしろシルエットというべきである。
 - 人形劇の人形もふつうは注目されるものでないものに注意を向けさせるので、もっと目立たないものにすべきである。
 - 意識されたり、注目されたりしない仕方では出会われるようなものが影の基本的な特徴である。
 - 影は注意深く見れば、ふくれあがって中心から飛びだして見えるはずのものである。
22. セザンヌがサント・ヴィクトワール山を描くときに克服する必要のあった問題とはどのようなものか。以下のうち最も適切なものを選べ。
- 影というものとその言葉の意味を頭で考えてしまい、その影響を受けてしまうこと
 - 山にできている実際の影は変化するため、それに集中することが難しかったこと
 - 山の影は窪んでいるはずだという常識に抵抗して、他の人では考えられない独創的な解釈を見出すこと
 - 影がふくれあがり、中心から飛びだすため、形を明瞭に捉えることが難しかったこと

23. セザンヌの述べていることを、プラトンの「洞窟の比喩」と関連付けるなら、次のうちのどれが最もセザンヌの言っていることに近いといえるか。
- a. 普通人々が見ているものは知識を得る前の壁に映った影のようなものといえる。
 - b. 画家は風景を人々と同じようにはなく、むしろ逆の仕方で見なければならない。
 - c. 画家といえども、言葉がもつ意味に影響されてしまい、ものをあるがままに見ることはできない。
 - d. 理性や思考によってではなく、プラトンのいう感覚や見ることに頼らなければならない。
24. 資料に「プラトンの場合、影は主役ではなく脇役であった。ただし、それは主役ではなく脇役だということを常に意識させるような扱いになっているといえよだろう」とあった。このことを説明する文として最も適当なものは以下のどれか。
- a. 影の価値が劣っていることがはっきりと判るような位置づけになっている。
 - b. 影はどこまでも影であって、決して本体に取って代ることがないことがはっきりとされている。
 - c. 洞窟を出さえすれば、影の問題は解決するので、脇役は洞窟の中でだけ活躍する存在である。
 - d. 影とは違う本体を知らない限り、影が脇役だといえないが、一旦そのことに気づくと、脇役が脇役の役割を果たすことになる。
25. ヨブ記8章9節の影の意味と異なっている意味を示しているものはどれか。
- a. われわれはあなたの前ではすべての先祖たちのように、旅びとです。寄留者です。われわれの世にある日は影のようで、長くとどまることはできません。(歴代志上29章15節)
 - b. これらは来るべきものの影であって、その本体はキリストである。(コロサイ人への手紙2章17節)
 - c. まことに人は影のように、さまよいます。まことに彼らはむなしい事のために騒ぎまわります。(詩篇39篇6節)
 - d. しかし悪人には幸福がない。またその命は影のようで長くは続かない。彼は神の前に恐れをいだかないからである。(伝道の書8章13節)

26. イザヤ書25章4節の引用における陰の意味に最も近いものは以下のどれか。
- a. 暗黒の中に住んでいる民は大いなる光を見、死の地、死の陰に住んでいる人々に光がのぼった。(マタイによる福音書4章16節)
 - b. 神よ、あなたのいつくしみはいかに尊いことでしょうか。人の子らはあなたの翼のかげに避け所を得、あなたの家の豊かなのによって飽き足りる。(詩篇36篇7節)
 - c. ふくろうはそこに巣をつくって卵を産み、それをかえして、そのひなを翼の陰に集める。(イザヤ書34章15節)
 - d. たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわいを恐れません。あなたが共におられるからです。(詩篇23篇4節)
27. 旧約聖書の預言者が神自身をかげとして述べているものがあつた。この場合のかげの意味に最も近い記述はどれか。
- a. 親鳥が雛を翼の下に隠して守るように、民を守る神の働きがかげと考えられた。
 - b. 影を劣ったものとするプラトンの理解に対するユダヤの預言者の批判が認められる。
 - c. 神は正しい人に対して、厳しい暑さや光から守る影を用意される存在と考えられた。
 - d. 人々のいのちの危機を直接に防ぎ、安全を守る存在そのものが神と考えられた。
28. 「影がないと人間は生きていけないのである。いやそもそも、影がないということは元の本体も存在しないという意味になる」と資料にあつた。ここでは影の必要について二つの異なったレベルが問題になっている。その二つの関係を述べたものとして最も適当なものは以下のどれか。
- a. 人間は現実的に存在する限り影を持たないことはありえないが、特定の地域の人にとってはそれ以上に影が生きるための保証になっている。
 - b. 暗闇も影と考えると、一定の暗さや涼しさは人間が生きる不可欠な条件である。また影という概念は何か本体に付き添うという意味なしには成立しない。
 - c. 影が必要だという点で人間は特別であるが、影が伴うという点については人間に限らず、他の動物や物体についてもいえることである。
 - d. 前者は精神的宗教的な意味の影の必要性であり、後者はそうしたものは関係なく、光学的、物理的な法則性を意味している。

29. 『影のない女』の妃が影を手に入れたいと願って、乳母とともに人々の暮らしの中に入って行く行動の象徴的意味として、以下のうちのどれが最も適当であるか。
- 皇帝の孤立の象徴である王宮から出ること、皇帝の孤立を打破し、領民との関係を築き直す意味を持つ。
 - 妃が精霊であることを放棄して、皇帝を救うためにどんな苦勞をも厭わないという自己犠牲の意味を持つ。
 - 妃が意図せずにバラク夫婦に対して行った許されない行動を償うという意味を持つ。
 - 皇帝と妃の他の人々からの孤立関係を打ち破り、人々との連帯の中での関係を実現するという意味を持つ。
30. 妃が影を手に入れようとした時に思い描いたであろう可能性に含まれていないのは以下のどれか。
- 誰か他人に奉仕でもして、その努力によって影は手に入れられると考えた。
 - 海の底であれ、どれほど遠い場所であれ、影が手に入るなら、苦勞は厭わない。
 - 影はどこかで売られているので、それを見つければ買うことができる。
 - 影を手に入れることが、その所有者の存在を否定したり、傷つけることになる。
31. 妃がバラクの足元に倒れていた。その妃の姿が象徴していることの説明として、以下のうちのどれが最も適当な理解か。
- 影を手に入れようとして、捉えられなかった妃の絶望
 - 影だけを手に入れたいと思っていた妃のバラク夫妻に対する罪責感
 - 灯りが消えて頼りだった乳母と離れてしまったことの心もとなさ
 - バラクの行為を阻止しようとした妃の強い意志
32. ホーフマンスタールは「この瞬間、二人はまことの夫と妻になった」のである、と書いている。このことの意味として最も適当なものは以下のどれか。
- 二人とも明瞭な意識なしに、心の中が相手のことでいっぱいになっていること
 - 激しい怒りと争いとが通り過ぎたあとの一瞬の激しい変化が二人を支配していること
 - 精霊の王女と狩猟中の皇帝の間に起きた危機における変貌と同じものがそこにあること
 - バラクの足元に倒れた妃の存在が、二人を一つにつなぎ合わせる働きをしていること

33. 妃が皇帝の石像のそばで語った言葉の訳として最も適当なものは以下のうちどれか。
- a. バラクよ、わたしはあなたに悪いことをしてしまいました。
 - b. バラクよ、わたしはあなたに対して罪を認めます。
 - c. バラクよ、わたしはあなたに償えない借りがあります。
 - d. バラクよ、わたしはあなたに対して負債を負っています。
34. 資料には「影を手に入れるという目的が失われたかに見えたまさにこの場面において、妃に影がまとわりついてくる」と書かれている。これに続いて起こると思われる場面として、以下のうちどれが最もふさわしいと考えられるか。
- a. 妃は精霊の国に帰っていく。
 - b. 皇帝の石像が崩れ落ちる。
 - c. 妃の影が再び飛び去ってゆく。
 - d. 皇帝の影と妃の影とが一つに重なる。
35. 「これはバラクが妻を許したことを意味していると考えられる」と資料にあるが、この「これ」が意味しているのはどれか。
- a. 影が妻の元に戻ってきたこと
 - b. 自らの行為の責任を妻が感じていること
 - c. バラクと妻が思いがけず出会ったこと
 - d. 妻が一切を夢見ごちで受けとっていること
36. 「影のない女」の話の展開において、人間の影を手に入れることの本質的な困難と関係がないことは以下のどれか。
- a. ある夫婦の関係を引き裂かねばならないこと
 - b. 一人の人間の存在を否定することになってしまうこと
 - c. 影を買い取る相手が直ぐに見つからないこと
 - d. 妻が子供を生まない約束をする必要があること

37. 本資料において「影のない女」への言及が教えていることを述べたものとして、以下のうちどれが最も適当であるか。
- a. 影を得るということは普通の人間として生きることであり、人間が人間らしく生きる上で愛や自己犠牲の重要性を忘れてはならない。
 - b. 影を得るという異常な目的の達成には、生命の危険や人間関係の破壊のような重大な問題を避けることができない。
 - c. 影を失ったら人間として生きることができないので、それを取り戻す為には他者救済と自己変容の大変な努力を要する。
 - d. 影を簡単に消極的、否定的なものと考えてはならず、むしろ人間が人間として生きていくために不可欠で重要な要素である。
38. 辞書に出てくる影の多様な意味の中で、本資料での議論に出てこないものは、以下のうちどれか。
- a. 細部は明瞭でないがそのものの輪郭として捉えられる姿、形
 - b. 本体そのものではないこと、身代り
 - c. 本体に付き添って離れないもの
 - d. やせ細った姿の形容
39. 本資料「影について考える」にもしも副題をつけるとすると、以下のうちどれが最も適当と思われるか。
- a. 真実の知識と影の必要性
 - b. 影の意味と捉えがたさ
 - c. 影の持つ積極的な意味
 - d. 影の理解の歴史的変遷

40. 資料の終わりの部分で「我々はここで、影の持つ意味について何らかの結論を得ようとは考えない。そうすれば、それは意図を否定することになるかもしれない」と述べられている。ここで意図を否定することになるというのはどういうことを意味しているだろうか。以下のうち最も適当なものを選べ。
- a. 影は本体ではないのであるから、影ばかりに関心を向けることによって、物事の正しい認識が得られなくなってしまう。
 - b. 影について何らかの結論を得るということは、影についてはっきりした理解をもつことであり、それでは洞窟の外に出たことになってしまう。
 - c. 影については多くの問題があるが、それを本体を解明するような仕方では明らかにしたら影の影たる特徴が消滅してしまうであろう。
 - d. 影という問題は、それについて色々な謎や問題があることを知ればよいのであって、それ以上に追求することは意味がないことである。